

Index

研究チーム紹介	1	表彰	6
所内研究討論会レポート	3	科学研究費助成事業の新規採択状況	6
二国間交流事業 日韓共同研究シンポジウムの開催	3	競争的資金の採択状況	7
第150回老年学・老年医学公開講座レポート	4	老年学・老年医学公開講座開催予定	8
新入職員紹介	4	主なマスコミ報道／編集後記	8
ノルウェーベルゲン大学訪問	5		



第150回老年学・老年医学公開講座 (P.4)

研究チーム紹介 老年病態研究チーム

チームリーダー 重本 和宏

サルコペニア・フレイルなどの老年病を対象とした先端的な研究成果を基に、病院および社会科学研究部門と連携して、新しい介護予防法の創出と臨床への実用化を目標としています。

老年病態研究チームホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/rounenbyotai/>

心血管老化再生医学研究

テーマリーダー 豊田 雅士

急速な高齢化を背景に心不全患者が増え続けています。心不全は数十年かけてじわじわと進行し重症化していきます。重症化すると治療が限られてしまうため、できるだけ早期に診断することが必要となりますが、実際初期に気づくことは難しいといわれており、その対策が急務となっています。



左奥がテーマリーダー

私たちは、第三期中期計画では心臓の老化・病態の分子機構を解明し、心機能の再生を目指した研究を推進していきます。心臓は、全身に血液を送るポンプ機能として一生涯にわたり一定の役割を果たします。その中で、加齢や修復・炎症など、生体内の様々な状況変化に伴って、どのように組織構造・機能を変化させているのかを捉え、心血管

病の早期診断や新たな治療法、そして心臓機能の再生につながる基盤研究を行っていきます。また高齢者医療における難治性疾患に対して期待の高い再生医療について、病院部門を含めた連携により、安全で安心した医療として提供できるよう貢献をしていきたいと考えています。

研究成果は積極的に発信し、皆様のご理解を得るよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

心血管老化再生医学研究ホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/rounenbyotai/shinketsukanroukasaiseiigaku/>

筋老化再生医学研究

老化に伴う骨格筋量の減少、機能低下は「サルコペニア」と呼ばれ、健康を損なう要因として問題になっています。私たちのグループでは、特に、骨格筋に存在する幹・前駆細胞に注目し、サルコペニアのメカニズム解明と予防・治療法の開発を目指した研究を行っています。

骨格筋には2種類の幹・前駆細胞が存在します。一つは**筋衛星細胞**で、骨格筋が損傷を負った際に新しく筋細胞を生み出し再生を起こす幹細胞として機能します。老化によって筋衛星細胞の数が減少し筋再生が遅延しますが、そのメカニズムを解明し、高齢者の転倒などによる重度傷害からの回復促進、リハビリの効率化へと発展させます。もう一つの細胞は**間葉系前駆細胞**で、筋の脂肪化や線維化病態に寄与する細胞です。老化に伴って、筋の脂肪化・線維化は進行しますが、間葉系前駆細胞はこうした病変を防ぐうえで理想的な標的となります。最近の研究から、間葉系前駆細胞は病態に寄与するだけでなく、通常は筋組織を維持する働きをしていることも明らかになってきました。間葉系前駆細胞の悪い側面（脂肪化・線維化病態への寄与）を抑制し、良い機能（筋維持機能）を発揮させることで、骨格筋の健全性を維持し、高齢者の健康増進へとつなげていきたいと思っています。

筋老化再生医学研究ホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/rounenbyotai/kinroukasaiseiigaku/>

テーマリーダー 上住 聡芳



中央がテーマリーダー

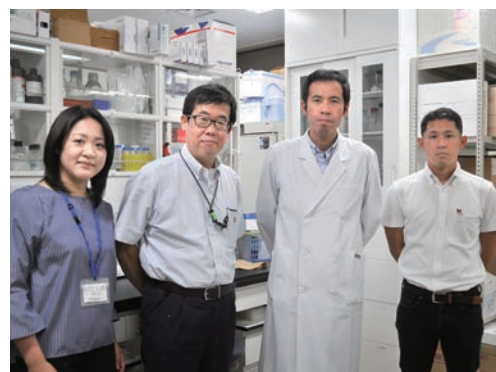
運動器医学研究

東京都では、全国平均を上回る人口高齢化（2005-25年：38%増、85万人増）が進行しています。平成28年度の厚労省資料によると、東京都は都道府県別健康寿命で男性が24位で女性が38位に留まっています。東京都民の健康寿命の延伸と有効な介護予防の方法を達成することが求められています。運動器医学研究テーマでは、2018年度から始まった第三期中期計画において、高齢者疾患および介護の原因となるサルコペニア・フレイルの発症機構を解明して、その学術的な成果を科学的根拠に基づく早期診断・予防・治療法の開発へ発展させることを目標としています。これまで私達のテーマでは、「神経筋シナプスに着目したサルコペニア・筋萎縮の研究」と「骨格筋代謝の可塑性に基づくサルコペニア・フレイルの解明」に焦点を絞り、疾患に関わる独自の概念の確立と研究の推進を可能にするオンリーワンの新技術を開発してきました。第三期中期計画ではこれらの成果を活用することで、サルコペニア・フレイルの発症メカニズムを解明して、有効な老年病の早期予防・早期診断・先制治療法のイノベーションを都民・国民へ還元したいと考えています。

運動器医学研究ホームページ：

<http://www.tmg Hig.jp/research/team/rounenbyotai/undokiigaku/>

テーマリーダー 重本 和宏



左から2番目がチーム及びテーマリーダー

所内研究討論会レポート

5月14日(月)に所内研究討論会が行われました。発表者より、当日の発表内容を紹介します。

座長：神経画像研究チーム 研究員 多胡 哲郎 社会参加と地域保健研究チーム 桜井 良太

「加齢に伴う脳ミトコンドリアの機能低下とコエンザイム Q による回復」

発表者：老化制御研究チーム 研究員 高橋 真由美

ミトコンドリアは、私たちの身体に必要なエネルギーを作り出している重要な細胞内小器官です。加齢に伴うミトコンドリア機能低下がいつ、どの臓器で最初に起こるかをマウスで調べてみると、平均寿命の半分くらい（マウスでは15ヶ月齢一ヒトの40歳代に相当）の時期に雄マウス的大脑で始まることを見つけました。脳ミトコンドリア機能の低下に伴い、パーキンソン病（PD）様の神経機能や運動機能の低下も起こりました。原因として脳内のコエンザイム Q（CoQ）量が減少していることに注目し、飲水投与して脳内に確実に到達する CoQ を探し出しました。この CoQ を一週間老齢マウスに飲ませたところ、脳ミトコンドリア機能の回復をはじめ、神経機能や運動機能も改善されました。この結果は、CoQ により PD 様症状が改善される可能性を示唆しています。



「認知症症状を軽減するためのケアアプローチに関する研究」

発表者：福祉と生活ケア研究チーム 研究員 伊東 美緒

認知症が進行すると、記憶障害やコミュニケーション障害によって日常生活に支障をきたすようになります。この日常生活上の支障を、他者が“正常な形”に誘導しようとするのが、認知症の行動・心理症状（BPSD）をかえって悪化させてしまうことは少なくありません。介護する人がよかれと思って細かく指摘すると、認知症の本人は“馬鹿にされた”、“指図された”などと感じ、関係性が悪化することがあります。指摘するのではなく、相手の注意を話しかけるこちら側に向けて、（目を合わせてから）ゆっくり話しかけるなどのシンプルなコミュニケーション方法を知ることが、介護者が認知症本人との関係性を維持しながらケアを行っていく上で大切であることを示す研究を紹介しました。



三国間交流事業 日韓共同研究シンポジウムの開催

老化制御研究チーム 技術員 石井 智子

5月29日(火)、韓国、釜山大学の Jaewon Jee 教授、Seung Cheol Chang 教授をお招きし、「The 1st Joint Research Symposium Between Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology and Pusan National University」を開催致しました。分子老化制御、石神昭人研究部長の開会挨拶から始まり、ハーバード大学の篠崎昇平博士による特別講演と、埼玉セントラル病院の丸山直記院長による教育講演が行われました。一般講演として、釜山大学からは、大学院生を含む若手研究者4名、分子老化制御研究チームからは、石井智子、谷津智史、土志田裕太の3名、細胞機能研究チームからは、藤田泰典、川上恭司郎の2名が研究発表を行いました。日本と韓国の学生にとっては、初めての英語での口頭発表と質疑応答の経験を、私にとっては活発な国際交流の貴重な経験を通して、自らの研究について顧みる良い機会となりました。



第150回老年学・老年医学公開講座レポート

老年病理学研究チーム 専門副部長 相田 順子

第150回の公開講座は「ストップ！その生活習慣は本当に大丈夫？」というテーマで、5月30日(水)に練馬区文化センターにおいて開催されました。当日は雨天にも関わらず659名の方々にご参加いただきました。石神研究部長の司会のもと、許センター長、森田練馬区健康部長からの挨拶の後、3つの講演が行われました。1)「高齢者と生活習慣病」(埼玉セントラル病院 丸山直記院長)では、血管の老化が糖尿病との関連を含めて重要であること、血圧やコレステロールを下げ過ぎてはいけないなどの話がありました。2)「がんにならないために今、見直す生活習慣」(研究所 石渡俊行研究部長)では、なぜ高齢者にがんが多いのか、たばこやお酒、塩分などの生活習慣とがんの関連性、また膀胱癌の最新の研究紹介がありました。3)「健康長寿を楽しむ生活習慣」(研究所 北村明彦研究部長)では、高齢者の生活に重要なメタボリックシンドロームとフレイルについて、これらを予防、改善するための食事の工夫や筋力運動の紹介がありました。どの講演も平易な言葉で丁寧な説明がなされ、参加者の方々にとって生活習慣を見直し、健康な生活を送るよいきっかけになったのではないのでしょうか。



質疑応答

公開講座当日には、たくさんのご質問をいただきました。質疑応答の一部をご紹介します。

Q メタボはよくないと言われるが、痩せすぎはなぜ良くないのでしょうか。

A 病気で痩せるということも含まれますが、それ以外でも高齢になり、筋肉が落ちてきたことで痩せてしまうことは良くありません。例えば身長が160cmなら体重が40kg台では痩せすぎで、筋肉が少なくなっていることが多いと思われます。体重が平均よりも少し少ないという程度であれば、影響はないと思いますのでご安心ください。

Q 前立腺がんと膀胱がんは生活習慣と関係ありますでしょうか。

A 膀胱がんについては、タバコの影響が非常に大きいことがわかっています。前立腺がんは、高齢者の方に多く起りますが、様々な治療法があり、10年生存率も90%を超えられています。早く見つけ、きちんとした治療を受けられれば対処できるがんです。前立腺がんは生活習慣との関連についてははっきりした研究結果はないと思います。

新入職員紹介

社会参加と地域保健研究チーム 研究員 村山 陽

〇これまでの研究内容

平成30年5月より、社会参加と地域保健研究チーム 大都市高齢者基盤研究の研究員として着任した村山陽と申します。私はこれまで「地域の世代間交流」に着目して次のような研究を中心に行ってきました。

1. 世代間交流の理論研究

世代間交流に関する研究は多くありますが、世代間関係(例えば、子どもと高齢者)がどのように成立し、それによりどのような効果がなぜ生じるのかを説明する理論は示されておられません。そのため、うまくいかない実践に対して見直しが行われないまま中断となるケースも多く認められます。そこで、世代間交流を説明するための包括的な理論の構築を試みています。

2. 世代間交流の効果検証

子どもと高齢者の世代間交流がそれぞれの世代や地域全体に波及する効果を明らかにするために、様々な交流場面(施設入居者と園児との交流、シニアボランティアと小学生との交流等)を調査フィールドとした介入研究に携ってきました。



3. 地域における世代間交流の現状把握

各地で実施されている世代間交流事業（例えば、昔あそび、伝統行事、絵本の読み聞かせ活動）の実態と課題を把握するために、文献調査および実施者や参加者に対する質問紙調査を行っています。これらの調査データをもとに、社会の変化に対応した新たなプログラムの開発を目指しています。

○これからの展望

急速な少子高齢化が進む今日、従来の人的ネットワークに限界が生じ「世代間断絶」を起因とする高齢者を取り巻く社会問題が取り沙汰されています。こうした問題の解決に向けて、「世代間交流」という視点から多世代共有社会のあり方を模索していきたいと考えております。

○受賞報告

日本健康心理学会第31回大会にて、「高齢者の慢性的なストレスに対するコーピングの検討」と題して発表を行い「優秀発表賞」を受賞しました。本賞は、日本における健康心理学の発展に寄与することを目的に、年次大会において優れた発表を行った若手会員の研究発表を表彰する賞です。高齢者の慢性型ストレス尺度*¹⁾ およびコーピング尺度*²⁾ を作成して、精神的健康との関連を検証した結果、高齢者は慢性的なストレスのタイプに応じてコーピングを選択的に用いているが、それがストレス反応の緩和につながっていない可能性が示唆されました。

* 1) 慢性型ストレス尺度：高齢者の持続的なストレスの要因を測定するための質問紙

* 2) コーピング尺度：高齢者の慢性的なストレスに対する対処方法の個人差を測定するための質問紙

ノルウェーベルゲン大学に訪問しました

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 伊東 美緒

現在、当研究所ではノルウェー西岸にあるベルゲン大学医学部との協働研究体制を構築しようとしています。きっかけは2017年から2度にわたり、ベルゲン大学 Per Bakke 医学部長や研究プロジェクトの代表 Bettina Husebø 教授らが当センターを訪問されたことでした。認知症ケア、エンドオブライフケア、家族介護、介護業界におけるIT活用などをテーマに、日本とノルウェーの実態や研究内容を共有してきました。また、2018年5月7日から9日まで、当センターの新開省二副所長、島田千穂研究副部長と研究員の涌井智子、伊東美緒、池内朋子がベルゲン大学からの招聘を受けて、3日間かけてノルウェーの施設ケアの実態を見学するとともに、両国における高齢者介護研究のこれからについて議論を行いました。

両国の国土面積は同じくらいですが、人口は日本が1.27億人（高齢化率26.6%）に対して、ノルウェーは約530万人（高齢化率は16.6%）と大きく異なります。それでも高齢者を取り巻く課題は共通しており、制度や研究内容を共有し、よりよい研究につなげていきたいと思っています。



新開副所長とHusebø教授



(中央)新開副所長、(右から)池内研究員、涌井研究員、伊東研究員、島田研究副部長



Geriatrics & Gerontology International Best Article Award 2017

Effects of a multifactorial intervention comprising resistance exercise, nutritional, and psychosocial programs on frailty and functional health in community-dwelling older adults : a randomized, controlled, crossover trial
「レジスタンス運動*、栄養、心理・社会プログラムからなる複合介入が地域在住高齢者のフレイルと機能的健康度に及ぼす影響：ランダム化クロスオーバー比較試験」

社会参加と地域保健研究チーム 研究員 清野 諭

本受賞論文は、週2回のレジスタンス運動、多様な食品摂取を目的とした講義・演習、参加者間のグループワークからなる複合プログラムによって、フレイルの低減と心身機能の向上がみられたことを報告したものです。本研究成果は、地域住民がフレイル予防教室を運営するための研修プログラムに応用されるとともに、現在実施中の“フレイル予防の地域介入研究”の基盤となっています。参加者の皆様はじめ、研究チームや鳩山町の関係者の皆様にあらためて感謝申し上げます。

*）レジスタンス運動：筋肉に抵抗（レジスタンス）をかける動作を繰り返しおこなう運動



右から2番目が筆者

日本放射線技術学会 平成29年度技術奨励賞（核医学分野）受賞 第74回日本放射線技術学会総会学術大会 Bronze Award 受賞 第12回世界核医学会 BEST POSTER AWARD TECHNOLOGIST 受賞

神経画像研究チーム 技術員 我妻 慧

掲題の賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。技術奨励賞は、放射線技術に関する研究者の研究奨励のために年に1回、各専門的分野でひとり授与される賞です。今回私は、検査中の呼吸のせいで画質が悪くなってしまった肝臓がんの薬剤集積に対し、新しい呼吸同期PET/CT撮像を施行することで、肝臓がんの動く様子を高画質に画像化することが可能になったことを、模型実験と臨床例から報告したことが評価されての受賞となりました。Bronze AwardとBEST POSTER AWARD TECHNOLOGISTの受賞は、東北大で開発されたタウPETイメージング薬剤である $[^{18}\text{F}]$ 標識THK5351を模擬した脳の模型実験を行い、最適なPET画像再構成条件を検証した結果を、それぞれの学会で発表し、評価されたものです。今後、他のタウPET薬剤で同様の検討を行いつつ、多施設、多機種での検討を進めていきたいと考えています。



平成30年度 科学研究費助成事業の新規採択状況

(平成30年6月追加分)

所属研究チーム	氏名	研究種目	新規	研究課題
社会参加と地域保健	桜井 良太	挑戦的研究（萌芽）	☆	認知機能低下高齢者の社会貢献活動継続の秘訣を探る—社会的・神経生理学的検討—
	天野 秀紀	挑戦的研究（萌芽）	☆	要介護認定で見られる「認知症」の発症前過程に基づく類型化と類型別予防法の検討
自立促進と精神保健	栗田 圭一	挑戦的研究（萌芽）	☆	権利ベースのアプローチを適用した「認知症とともに暮らせる地域社会」のモデル開発

※ ☆：新規採択者

競争的資金の採択状況

平成 30 年 7 月現在

代表/分担	氏 名(所属)	研究 課 題
平成 30 年度 厚生労働科学研究費補助金		
政策科学総合研究事業		
○	石崎 達郎(福祉と生活ケア)	医療費適正化に向けた生活保護受給者の医薬品処方および生活習慣病の実態調査：大規模レセプト分析
難治性疾患等政策研究事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	神経変性疾患領域における基盤的調査研究
○	村山 繁雄(神経内科)	プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究
○	杉原 毅彦(膠原病・リウマチ科)	難治性血管炎に関する調査研究
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業		
○	新開 省二(社会科学系)	健康に与えるロコモティブシンドロームの影響に関する研究
長寿科学政策研究事業		
○	石崎 達郎(福祉と生活ケア)	介護保険事業(支援)計画に役立つ地域指標-全国介護レセプト等を用いて-
○	渡邊 裕(自立促進と精神保健)	嚥下造影及び嚥下内視鏡を用いない食形態判定のためのガイドラインの開発
健康安全・危機管理対策総合研究事業		
☆	藤原 佳典(社会参加と地域保健)	包括的支援体制構築に向けた市町村保健センターと他分野の連携に関する研究
認知症政策研究事業		
☆	栗田 圭一(自立促進と精神保健)	若年性認知症の人の生活実態調査と大都市における認知症の有病率及び生活実態調査
平成 30 年度 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED)		
再生医療実用化研究事業		
○	金井 伸雄(研究支援センター準備室)	先天性食道閉鎖症術後の小児を対象とした自己上皮細胞シートによる再生治療の FIH 臨床研究
革新的がん医療実用化研究事業		
○	松田 陽子(病理診断科)	TERT 関連バイオマーカーによる疾患横断的(バスケット型)診断法の確立に関する研究
難治性疾患実用化研究事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	オミックス解析に基づく稀少難治性神経疾患の病態解明
○	村山 繁雄(神経内科)	進行性核上性麻痺と関連タウオパチーの患者レジストリと試料レポジトリを活用した診療エビデンスの構築
○	萬谷 博(老化機構)	新規修飾体リビトールリン酸の病態生理機能に着目した福山型筋ジストロフィーの発症機序の解明と治療法の開発
長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業		
○	中島 純子(自立促進と精神保健)	嚥下障害に対する包括的嚥下障害基礎訓練法の開発と有効性の検討
長寿・障害総合研究事業 長寿科学研究開発事業		
☆	平野 浩彦(歯科口腔外科)	認知症の容態に応じた歯科診療等の口腔管理及び栄養マネジメントによる経口摂取支援に関する研究
○	増井 幸恵(福祉と生活ケア)	高齢者の自立度を測定する効果的調査票の開発と検証
○	渡邊 裕(自立促進と精神保健)	要介護高齢者半減を目指した日常生活動作指標の開発とテラーメイド型介入方法の検証
長寿・障害総合研究事業 認知症研究開発事業		
☆	栗田 圭一(自立促進と精神保健)	若年性認知症の有病率・生活実態把握と多元的データ共有システムの開発
○	栗田 圭一(自立促進と精神保健)	認知症の人の機能改善のためのエビデンスに基づくケア、看護、リハビリの手法や体制に関する研究
○	石井 賢二(神経画像)	脳内アミロイドβ蓄積を反映する血液バイオマーカーの臨床応用に向けた他施設共同研究
○	石井 賢二(神経画像)	適時適切な医療・ケアを目指した、認知症の人等の全国的な情報登録・追跡を行う研究
○	石井 賢二(神経画像)	プレクリニカル期におけるアルツハイマー病に対する客観的画像診断・評価法の確立を目指す臨床研究
○	石井 賢二(神経画像)	若年性優性遺伝性アルツハイマー病に関する多元的臨床データ収集と共有化による効率的な病態解明
○	金 憲経(自立促進と精神保健)	適時・適切な医療・ケアを目指した、認知症の人等の全国的な情報登録・追跡を行う研究
○	荒木 厚(糖尿病・代謝・内分泌内科)	高齢者 2 型糖尿病における認知症予防のための多因子介入研究 ーパイロット研究ー
○	伊東 美緒(福祉と生活ケア)	BPSDの解決につなげる各種評価法とBPSDの包括的予防・治療指針の開発～笑顔で穏やかな生活を支えるポジティブケア
○	鈴木 宏幸(社会参加と地域保健)	高齢者における聴覚障害と総合機能・認知機能の包括的評価：難聴補正による認知症予防を目指した研究
○	高橋 正時(耳鼻咽喉科)	高齢者における聴覚障害と総合機能・認知機能の包括的評価：難聴補正による認知症予防を目指した研究
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	脳卒中後てんかんの診断・予防・治療指針の策定
○	荒木 厚(糖尿病・代謝・内分泌内科)	後期高齢者の ADL 維持・改善に着目した栄養療法の開発
臨床ゲノム情報統合データベース整備事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	認知症臨床ゲノム情報データベース構築に関する開発研究
○	新井 富生(病理診断科)	ゲノム創薬・医療を指向した全国規模の進行固形がん、及び、遺伝性腫瘍臨床ゲノムデータストレージの構築
革新的先端研究開発支援事業		
○	萬谷 博(老化機構)	機械受容応答を支える膜・糖鎖環境の解明と筋疾患治療への展開
脳科学研究戦略推進プログラム		
○	村山 繁雄(神経内科)	日本ブレインバンクネットの構築

☆：代表、○：分担

老年学・老年医学公開講座 開催予定

第152回老年学・老年医学公開講座

『「フレイル」ってなに？～自立した老後を過ごすための予防、診断、対策～』

1. 『フレイルの予防になぜ運動と食事が重要なのでしょうか？』

副所長 重本 和宏

2. 『脳のフレイル：加齢によるもの忘れと認知症の違い』
神経画像研究チーム 研究員 石橋 賢士

3. 『社会的側面からみたフレイル～外出と交流のススメ』
社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 藤原 佳典

日 時：平成 30 年 11 月 28 日(水)
13：15 から 16：15 まで

場 所：北とぴあさくらホール (定員 1,300 名)

東京都北区王子 1 - 11 - 1

JR 京浜東北線 王子駅 北口徒歩 2 分

東京メトロ南北線 王子駅 5 番出口直結

都電荒川線 王子駅前駅 徒歩 5 分

主なマスコミ報道

H30.5~H30.7

副所長

新開 省二

- 「親の栄養不足に注意」
(保健同人社「笑顔 2018 年 6 月号」 H30.6.10)
- 「健康長寿のための 12 か条」
(福祉住環境コーディネーター協会「福祉住環境コーディネーターのスキルアップ情報誌 FJC」 H30.6.25)

老化制御研究チーム

研究部長 石神 昭人

- 「～シミシワ・病気予防・老化防止も！～ビタミンC 枯れを賢く乗り切れ！」
(TBS「健康カプセル！ゲンキの時間」 H30.6.3)

老化制御研究チーム

研究員 高山 賢一

- 「前立腺がんを神経様の形態へと悪性化させる因子の発見と診断・治療への応用について」
(日経メディカル開発「日経バイオテク」 H30.5.14)

老化脳神経科研究チーム

研究部長 堀田 晴美

- 「膀胱に作用する副交感神経を押さえて夜間頻尿を改善」
(日経 BP 社「日経ヘルス」 H30.6.2)

社会参加と地域保健研究チーム

研究員 谷口 優

- 「認知症に備える」
(毎日新聞社「毎日新聞」 H30.5.13)

社会参加と地域保健研究チーム

研究員 横山 友里

- 「75 歳過ぎて『食べられなくなる人』の特徴」
(講談社「週刊現代」 H30.6.23)

社会参加と地域保健研究チーム 非常勤研究員 成田 美紀

- 「ずっと元気にご長寿レシピ」
(NHK 出版「きょうの健康テキスト」 H30.6.21)
- 「高齢者の食生活について」
(フジテレビ「とくダネ」 H30.6.26)
- 「1 日 1 回の牛乳摂取がサルコペニア予防に有効か」
(株式会社ケアネット「CareNet」 H30.6.27)

自立促進と精神保健研究チーム

研究部長 栗田 圭一

- 「認知症当事者の相談体制について」
(日本経済新聞社「日本経済新聞」 H30.6.6)
- 「本人にとってのよりよい暮らしガイドについて」
(一般社団法人全国医業経営支援協会「Doctors journal」 H30.7.1)

自立促進と精神保健研究チーム

研究部長 金 憲経

- 「～正しく歩いて若返る！～健康のカギ・歩行年齢ってナニ!？」
(TBS「健康カプセル！ゲンキの時間」 H30.5.20)

福祉と生活ケア研究チーム

研究部長 石崎 達郎

- 「高齢外科患者における握力低値と術後せん妄の発生」
(読売新聞社「読売新聞」 H30.6.16)

福祉と生活ケア研究チーム

研究部長 大淵 修一

- 「健康寿命 UP 術」
(産経新聞社「夕刊フジ」 H30.6.20 6.27 7.4)



6月18日には大阪北部地震が、そしてその後まもなく西日本集中豪雨が発生しました。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々へ心からお見舞いを申し上げます。私事ですが、私は1995年の阪神・淡路大震災で本棚から落ちてきた書籍に埋もれてしまった経験があります。幸い本棚が倒れることはありませんでしたが、家具の転倒により亡くなった方が少なからずおられたことを後日知り、大変肝を冷やしました。日頃から災害に対する意識を持ち、対策を練ることで回避できる被害もあります。防災の日をきっかけとして、日頃の備えを見直すとともに、防災について考えてみませんか？ (かりんとう)



平成 30 年 9 月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町 35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：http://www.tmghig.jp/J_TMIG/research/ 無断複写・転載を禁ずる